

平成 23 年 5 月 31 日

平成 22 年度 目白大学大学院言語文化研究科  
中国・韓国言語文化専攻 修士論文要旨

学籍番号 0995402 小澤 亜希  
指導教員 (主査) 小林 寛

雨森芳洲『交隣須知』の研究  
—江戸時代の朝鮮語学習書の特徴に関する考察・文末表現を中心に—

1. 研究目的

雨森芳洲『交隣須知』は日本および朝鮮で最も古く成立し、その後 200 年余り使い続けられた、日本人が作成し日本人を対象とした朝鮮語学習書として名高い。先行研究は系統研究や朝鮮語対訳の日本語を頼りにした国語史の研究が主軸であった。本研究においては朝鮮語部分に着目し分析することで、『交隣須知』の日本人にとっての学習書としての意義と特徴を探りたいと考えた。

2. 研究方法

原本に一番関係が深く、最も古い姿をみせるものとされる苗代川の写本を研究対象とした。朝鮮語と日本語は文法構造が類似していることから、特に文末の語尾の表現の学習に焦点を絞り、その用例検証を通じて明らかにした。本稿では全四巻の内、巻一を取りあげ、文末表現をすべて拾い出し分類してその特徴を明らかにした。朝鮮語例文の文末用言から「終結語尾」と「先語末語尾」を抽出し、「終結語尾 9 種類」・「時制」・「敬語」という対象を得て、その出現率や出現数の推移、それらの関係性を検討することで特徴を見出した。

3. 結論

終結語尾の検討を通じて、意思伝達方法の習得に関する工夫を分析した結果、段階的に言語を学習するという概念からなるものではなく、どの部門でも様々な文章終結の表現を学ぶことができるようになっていた。「時制」においても、一つの時制を習得してから次の時制を学ぶのではなく、どの部門でも万遍なく時制の表現に触れることができる。また、特定の方言が確認された。その方言が含まれた場合は特別な事情の伝達、相手に親近感を与えるような性格の例文が用いられており、表現技術の一つだと考える。

尊敬か謙譲を含む何らかの「敬語表現」を用いた例文は全体の 60.6%であり、話し手は「伝達事項を表現しながらも、場面や立場によって話し方を工夫したり、言葉による待遇表現を用いたりすることができる」ようになっている。その敬語表現の場合、疑問文に特定の傾向が見られた。正確な経緯は明らかにできなかったが、『交隣須知』編纂時、著者は相手に質問したり、事情を説明したりする場合に求められる会話表現の技術、接遇の表現などを重要視したことと考える。

『交隣須知』を読み進めると自ずとその地の文化・教養を身に着けられるようになっている。当時互いの公用語である漢文により意思疎通ができた事だが、朝鮮には漢文の中国とは全く起源を異にする文化があるとし、著者は真の交隣を図るために日本人が朝鮮語を学習する本書を編纂したと考える。その為、最初の朝鮮語学習書でありながら、語彙集のような形式ではなく、例文を中心とした体裁をとった。それこそが日本人通詞たちが朝鮮語を学習する上で効果的で意義があったと考える。

以上